



強く、しなやかな女性を育てる

学園型地域総合スポーツクラブ 十文字女子サッカーの挑戦

石山隆之（著）（2018年1月、徳間書店）

スポーツジャーナリスト 二宮清純

サッカー元日本代表監督の岡田武史は、自らを「ノマド」と称している。「自分の先祖は遊牧民じゃないか、と時々思うことがあります」と私に語ったことがある。

言わんとすることは、よくわかる。日本代表監督として初めてW杯（98年フランス大会）出場を果たした後、いくつものクラブからオファーを受けながら、選んだのはJ2に降格したコンサドーレ札幌だった。2度目の代表監督として、日本を海外でのW杯では初となる決勝トーナメント進出に導いた。身の振り方が注目されたが、指揮を執ったのは中国スーパーリーグの杭州绿城だった。帰国後は地域リーグのFC今治のオーナーに就任し世間を驚かせた。ことほどさようにサッカー人でありながら、岡田の人生はバウンドしたラグビーボールのように予測がつかない。

この本の著者である石山隆之もノマド的な人生を送っているスポーツ指導者である。大学時代はサッカー部に在籍しながらライフセービング部の立ち上げに加わり、教員になってからは安定した公務員の地位を捨て、私学に転じた。赴任した十文字学園を全国有数のサッカー強豪校に育てながら、それに飽き足らず、現在は「学園型地域総合スポーツクラブ」の構築を模索している。小気味いいほどの有為転変は、著者が今なお「進化」の過程に身を置いていることを意味している。

十文字学園が目指している「学園型地域総合スポーツクラブ」の実現は価値ある実験として評価したい。これまで学校スポーツは、ややもすると学内に閉じこもりがちで、施設を地域住民に開放したり、指導スキルを地域のコーチたちに提供することが少なかった。そのため、せっかく立派な成績を取っても、地域住民と喜びを分かち合うことができず、学内だけの「名誉」や「勲章」とどまりがちだった。

余談だが、旧知の米国人ジャーナリストから、こんな指摘を受けたことがある。「なぜ日本の学校はわざわざ“日本一”とか“優勝”という垂れ幕を飾っているんだ。あんな光景は他の国で見たことがない」。「学校の宣伝になるからだろう」と私。「いや日本一になるくらいの学校なら、宣伝しなくてもまわりの人は皆知っていないとおかしい。（米国では）学校はコミュニティを形成する貴重なパートナーののだが……」。痛いところを突かれたような気がした。

近年、サッカーのみならず、スポーツ界において「地域密着」という理念が定着したのはJリーグ初代チェアマン川淵三郎の尽力によるところが大きい。川淵は色紙を求められると、決まって「継続は力なり」としたためる。十文字学園が目指す「学園」と「地域」の融合の行く末をしかと見届けたい。

